

付録 大橋図書館年表

この年表は、3つ柱建てをして、中央に大橋図書館、その左右に、東京市と図書館界（本テーマと関連する項目に限定）、大橋図書館関係者の動向を比較できるようにした。また、本報告と対応するよう時期区分をして、テーマと関連する項目を採録し、主要な事項をゴシックで示した。なかには重要度の低い項目も図書館とは関係しないものも含むが、それらもひとつの図書館の歴史を考える切り口になるかもしれないと思い採録した。

1 前史 1887-1901 (明治20-34)

		東京市・図書館界	大橋図書館	大橋佐平・新太郎 坪谷善四郎・石黒忠恵・博文館など
1887	明治20	3.21 大日本教育会、神田一ツ橋に附属書籍館開館（閲覧券1回2銭） → 1896.12.20 帝国教育会 10.- 大日本教育会附属書籍館、「小学生生徒図書閲覧規則」を定める		6.15 佐平(53)、博文館創業 6.- 『日本大家論集』刊 -. - この年 佐平、初めて石黒忠恵を訪問か
1888	明治21	1.6 大日本教育会附属書籍館、夜間開館実施 7.6 「東京図書館規則」（15歳未満の入場を禁止）		-. - 佐平、居を日本橋本町一丁目に移す 新太郎(25) 上京
1889	明治22	3.25 文部省、東京図書館を参考図書館に、大日本教育会附属書籍館を普通図書館とする旨を同教育会に諭旨 7.15 大日本教育会附属書籍館、神田区柳町河岸に移転、開館式		
1890	明治23			-. - 佐平の四男省吾、義父高橋新一郎と上京、東京堂を創立
1891	明治24	9.9 大日本教育会附属書籍館書庫新築落成式（1891.3 落成仮開館、辻新次「新築書庫落成式演説」、田中稲城「学校外の教育」を演説）		
1892	明治25	3.26 日本文庫協会創立、第1回例会を開き発会式、会名は「日本文庫協会」と決定 → 1908.3.29 日本図書館協会		11.15 坪谷、博文館編輯局長 11.- 博文館日本橋区本町三丁目に移転
1893	明治26	3.- 大日本教育会附属書籍館、改築 10.- 同館では従来男子席と混同していたのを、事務室の一隅に区画して婦人席を置く（同年度女子の利用月平均3.4人）		3.17 佐平、在京新潟県人石黒、大倉らによる送別の宴 3.30 佐平、欧米視察（～10月）
1894	明治27	12.- 大日本教育会附属書籍館、「館外図書貸出」を開始、規則を定め、広告		5 佐平、内外通信社設立（～1897） 12.11 渡部又太郎（大橋乙羽）、佐平の娘とき子と結婚
1895	明治28	-. - 大日本教育会附属書籍館、東京図書館から貸与を受けていた図書 の大半を返却 -. - 図書館設置数、官立1館、公立4館、私立20館 計25館		1.- 坪谷、『太陽』編輯に従事 -. - 『太陽』少年世界』文芸倶楽部』の三大雑誌創刊、また、「懐中日記」発売（のち「博文館日記」）

				-.- 佐平、小石川の別荘に退隠、博文館の事業を専ら佐平の三男新太郎らに任せる
1896	明治29	12.20 帝国教育会書籍館発足(大日本教育会を改称)		-.- 新太郎、東京馬車鉄道会社監査役
1897	明治30	4.27 「帝国図書館官制」〔勅令第110号〕、田中稻城、帝国図書館長に就任 6.7 帝国図書館、夜間開館		9.- 新太郎離婚 10.- 新太郎再婚 -.- 新太郎、東京瓦斯会社取締役 佐平の甥山本留次博進社創立
1898	明治31	6.21 京都府立図書館開館式(借宅仮設 → 1908 新築開館)		5.23 佐平、大倉喜八郎の還暦銀婚祝園遊会に出席(石黒、大倉商業学校設立に参加) -.- 新太郎、東京瓦斯会社専務取締役
1899	明治32	11.1 県立秋田図書館開館(女子閲覧室あり) 11.11 図書館令公布〔勅令第429号〕		2.25 坪谷、牛込区区議員に当選(～1926.2) -.- 石黒、数年来大橋に公益事業を勧める -.- 新太郎、東京商業会議所議員に当選
1900	明治33	5.19 日本文庫協会、初代会長に田中稻城(帝国図書館長)を選任 11.17 日本文庫協会、東京市立図書館設立について意見を提出	-.- この年までに 図書館設立準備のため3万冊の図書を収集(『博文館五十年史』は1901年頃とする)	1.1 大橋乙羽、博文館支配人 3.31 乙羽、欧米視察(～9.3) 9.下 佐平、石黒を訪問
1901	明治34	5.16 県立秋田図書館、夜間閲覧開始(午後10時まで) -.- この年、図書館設置数、官立1館、公立14館、私立35館 計50館	2.- 大橋図書館設立(12万5千円、10万は資金、2万5千は維持費) 7.26 起工	1.- 佐平、石黒を訪問(一切の経営を、石黒、上田、田中に委嘱) 5.10 坪谷、東京市議員に当選(～1922.6) 6.1 乙羽没 11.3 佐平没 11.- 新太郎、第2代博文館社長

2 開館から関東大震災まで 1902-1923 (明治35-大正12)

		東京市・図書館界	大橋図書館	大橋新太郎 坪谷善四郎・石黒忠厚・博文館など
1902	明治35	2.1 成田図書館開館 10.10 東京市教育会長江原素六、東京市長に「通俗図書館設立建議」書を提出 → 1904.3 東京市会議決	5.25 大橋図書館協議員15名を囑託 6.7 竣工 6.15 大橋図書館開館式 6.19 伊東平蔵、大橋図書館主事 6.20 閲覧開始(1回3銭、雑誌1銭5厘、12歳以上の利用を可とし、婦人室を設ける) 6.- 『大橋図書館年報』(第1回)創刊(～第33回、1943)	5 石黒、大橋図書館協議員長、図書館長 6.- 坪谷、大橋図書館理事兼協議員 10.- 坪谷、「東京市立図書館論」、衆議院議員当選(1期のみ) -.- 新太郎、大日本麦酒(株)取締役、第一生命保険相互会社を創設し取締役
1903	明治36	7.6 山口県立山口図書館開館 7.- 寺田勇吉「東京市立図書館の創立に就て」	3.- 奨学閲覧券を発行、持参の児童は無料で閲覧できた 7.- 夜間開館規程を定める	-.- 新太郎、王子製紙(株)取締役、日本書籍(株)を設立し社長

		8. 1 日本文庫協会、第1回図書館 事項講習会開催（受講者54人） （大橋図書館・～8.14） 10.27 県立山口図書館、 夜間開館開 始 （午後9時まで）	8.1 夜間開館実施 （夏秋の7か 月、暖房なきため、雑誌閲覧室 と一部の図書の閲覧に限る） 8.- 講習会開催 11.- 『大橋図書館年報』創刊 （～33号、1943.5）	
1904	明治37	2.25 大阪図書館開館式（3.1一般 公開） 3.7 東京市会において通俗図書館 の設置を議決する	-.- 坪谷、1904年度の利用者の 地域別利用傾向を分析	3.7 坪谷、東京市会において通俗図 書館の設置を建議 -.- 新太郎、韓国（のちに朝鮮）興 業会社を創立し取締役
1905	明治38	7.15 日本文庫協会、尾崎東京市長 から、市立図書館建設計画につい て諮問を受け、調査委員（市島謙 吉、伊東平蔵、太田為三郎、坂本 四方太、田中稲城）を指名、計画 案を審議して答申		-.- 新太郎、横浜市金沢に別荘地を 購入（1906、1916にも）、東京商 業会議所副会頭
1906	明治39	9.10 -.- 伊東平蔵、東京市立図書 館事務嘱託（～1908.5.3） 10.7 竹貫直人（博文館で『少年世 界』などを編集）、東京の自宅に 私立少年図書館を設立（第1回閲 覧会を開く）→ 後年、日比谷 図書館に寄付 11.30 東京市立日比谷図書館設立	3.20 東京勸業博覧会に参考品と して書棚（図書館内陳列用）な どを出品（上野公園・～7.31） 9.10 伊東、東京市立図書館事務 嘱託に転出、坪谷が主事となる	1.27 坪谷、（新潟）加茂町に町立 図書館設立の議を申請、図書館設 備費、または同額の図書の寄附を 申し出、4.5 寄附（以降数度にわ たる）→ 1940.11 建築落成 （竹内善作が設計）→ 1941.4 開館 4.- 新太郎、大橋図書館の1902年以 降5年分の分割出資維持費基本金 及び雑費、1年繰り上げ全額支出 4.- 博文館改築落成 -.- 新太郎、清韓両国視察、（株） 国定教科書共同販売所社長
1907	明治40	11.12 東京市立日比谷図書館、開館 準備事務に渡辺又次郎を嘱託	6.30 『大橋図書館和漢図書分類 目録』刊	9.- 坪谷、外遊（～1908.4） 10.- 坪谷、海外図書館視察（～ 1908.4） -.- 新太郎、帝国製麻会社取締役
1908	明治41	3.31 東京市立日比谷図書館主事に 渡辺又次郎（～1911.8.31） 11.16 東京市立日比谷図書館開館 式 、11.21 閲覧開始（普通2銭、 新聞雑誌1銭）	7.6 『大橋図書館和漢図書分類増 加目録』刊	6.2 新太郎、欧米視察（～ 12.11）、日韓瓦斯（のちの京城電 気）会社を創立し取締役
1909	明治42	1.25 東京市立深川図書館設立 （9.10 開館、半開架閲覧） -.- この年 東京市立牛込・日本橋 簡易図書館設立	6.30 『大橋図書館洋書目録』刊	
1910	明治43	6.1 東京市立日比谷図書館、 館外図 書帯出 （貸出）開始 -.- この年 東京市立京橋・小石川・ 本郷・浅草の各簡易図書館設立	6.18 『少年用図書目録』刊 12.- 館外帯出仮規則 を決定	-.- 新太郎、韓清両国視察
1911	明治44	-.- この年 東京市立下谷台南・麻 布・本所・神田・芝・四谷の各簡易図 書館設立	1.6 館外帯出実施 10.7 第1回通俗教育講演会（一 般向）	-.- 新太郎、王子製紙会社取締役

1912	明治 45	-.- この年 東京市立 赤坂・神田第二・京橋第二 の各簡易図書館設立	4.1 従来雑誌新聞室のみ夜間開館していたのを前年6月に規則を改正し、 各閲覧室も夜間開館 5.18 通俗教育講演会(児童向) 8.1 夜間開館規則を廃し、3/1～10/30 午前8時～午後9時開館とする 12.26 『大橋図書館和漢図書分類増加目録』刊	-.- 新太郎、日本鋼管会社を創立し、取締役
1913	大正 2	4.- 簡易図書館を自由図書館と改称	6.27 通俗教育講演会開催(婦人向、1914、1915にも実施)	
1914	3	-.- この年 東京市立 中和・両国 図書館設立	11.1 夜間開館時間を延長して11月末まで午後9時閉館とする	-.- 新太郎、東京市会議員(1期のみ)
1915	4	3.31 東京市立日比谷図書館を中央図書館とする図書館体制が確立 12.- 坪谷善四郎 が市参事会で大正天皇即位礼に際し東京市へ下賜された10万円を基金としその利子で江戸誌料の収集を提案、可決(大札記念図書) -.- この年、東京市立日比谷図書館、「 図書問答用箋 」を置く、また目録検索上の質問に答えるために 室内電話 を置く	-.- 年度末、蔵書7万冊	-.- 新太郎、京城電気会社社長
1916	5			-.- 新太郎、明治製糖会社監査役、東京製菓会社を創立し監査役
1917	6	9.- 『東京市立図書館報』創刊(～11号、1920.4)	9.6 石黒が大橋図書館館長を辞任、坪谷が館長となる	-.- 博文館編集部を刷新 -.- 新太郎、日本工業倶楽部専務理事
1918	7	12.21 坪谷、日図協第9代会長 に選出(～1920.12.18)		9.- 坪谷、外遊(～1908.4) 10.- 坪谷、海外図書館視察(～1908.4) -.- 博文館を株式組織に、進一が社長、新太郎は監督
1919	8			-.- 博文館、日本橋区本石町に移転新築
1920	9		1.29 公益法人として認定	-.- 新太郎、朝鮮興業会社取締役会長
1921	10	4.1 東京市立日比谷図書館、新聞、雑誌の閲覧料を無料化 10.- 東京市立図書館、館報『 市立図書館と其事業 』創刊 → 『東京市立図書館と其事業』(46号:1928.7～77号:1939.3) -.- この年 東京市立 麹町 図書館設立		-.- 新太郎、日本勧業銀行参与理事
1922	11	4.1 東京市立 京橋図書館新築開館 (京橋会館内)、安全開架式閲覧採用 → 1923.9.1 関東大震災で全焼	7.1 鳥井熊一郎が主事となる 11.7 大橋図書館新館敷地買収契約	-.- 新太郎、朝鮮視察

			- 新館計画 震災前の蔵書 8万7千冊 閲覧者は1日平均370人	
1923	12	9.1 関東大震災により深川、京橋、一橋図書館などが被災 9.4 東京市立日比谷図書館、屋外新聞閲覧所を設置 9.20 東京市立図書館、臨時図書閲覧所を設置(6カ所)、閲覧再開(10.2には震災の罹災を免れた東京市立三田、麻布、四谷、小石川の4館で館外帯出を開始)	5.20 清水組、坪谷、顧問を委嘱した日比谷図書館館頭今沢が会合、新館設計を決定(年表は5/7) 7.28 新館(改築)予定宅地を購入、登記済み 9.1 関東大震災により全館、蔵書8万8千冊を焼失、同日、仮事務所を坪谷方に置く 12.1 旧館書庫跡を仮事務所とする 12.24 第1回童話の会開催、お話、映画、紙芝居の実演	1. 新太郎、大橋図書館に50万円の寄付申出(25万新築費他は維持基本金) 9.1 関東大震災により博文館、本邸、大橋図書館、印刷工場などを焼失、同日 金沢文庫建物を損傷、運営休止

3 震災復興から戦前まで 1924-1945 (大正13-昭和20)

		東京市・図書館界	大橋図書館	大橋新太郎 坪谷善四郎・石黒忠恵・博文館など
1924	13	3. 東京市会において、東京市立深川、京橋、一橋図書館3館の復興図書館建設費が合計100万円の予算化が決まる 6.1 東京市立一橋、京橋、本所、深川図書館閲覧再開	10.1 館外図書貸出事務を開始 この頃、震災後の収集により蔵書約1万冊	- 新太郎、日本郵船会社取締役
1925	14	3. 竹内善作、大橋図書館の建築計画に関与 6. 東京市立日比谷図書館、案内係を置く	1.21 当館で勉強して弁護士になった者で大橋会を組織、第1回会合を開く 5.17 仮事務所を移転 5.21 新館建設起工(鉄筋コンクリート造、書庫には鋼鉄製書架、土地代・建築費、約50万円)	1.31 新太郎、大橋図書館建築費25万円寄付 12.25 新太郎、同館維持基本金10万円寄付
1926	15	5.6 東京市立四谷図書館、書庫を開放し安全開架式とする 11.11~12 日図協、第20回全国図書館大会及び臨時総会を開催(第2日目は大橋図書館を会場)	5. 蔵書約4万冊 6.15 大橋図書館新築復興開館式(普通室5銭、新聞雑誌3銭、児童室2銭) 7.1 一般閲覧開始(児童室(新聞雑誌室と共用)を設置、出納所に新刊棚(半開架閲覧)を採り入れ、書庫内の昇降機設備、出納手のための寄宿舎など)	2.27 新太郎、大橋図書館維持基本金5万円寄付 4.26 新太郎、同館維持基本金5万円寄付 6.15 新太郎、維持基本金25万円寄付 6.29 新太郎、維持基本金5万円(累計75万円)寄付 8.2 本邸、麹町区六番町に新築落成 12.7 新太郎、渋沢栄一の推挙により貴族院議員に勅選
1927	昭和2		- 閲覧者が多数となり児童室を閉鎖	- 新太郎、東京電燈会社取締役、理化学興業会社取締役
1928	3	9.6 東京市立深川図書館新築開館、鉄筋コンクリート造、書庫を閲覧室に近接、安全開架式閲覧を採用、土足のまま入館できた	1.1 東京市立図書館から竹内善作が転入、主事となる 10.15 『大橋図書館図按及意匠に関する図書目録』刊	7.5 神奈川県参事会、県費5万円、大橋新太郎の5万円の寄付を併せ計10万円で金沢文庫・昭和塾(大典事業)建設を決定

			11.1 閲覧規程を改正し1年を通じ閉館時間を午後9時とする	-.- 新太郎、南朝鮮鉄道会社を創立し取締役、また 日本航空輸送会社を創立し取締役
1929	4	11.1 東京市立京橋図書館新築開館 (鉄筋コンクリート造、安全開架式閲覧を採用、実業図書室を兼ねた参考部を設け、1、2階は土足のまま入館できた)	8.1 図書分類改善(竹内善作考案の有機的分類法)に着手 4.- 『大橋図書館季報』創刊(～1巻2号、1929.11) -.- 柴野民三が採用され、児童室に配属	-.- 新太郎、朝鮮へ出張
1930	5	3.1 東京市立駿河台図書館開館 (1929.12.1一橋から改称、鉄筋コンクリート造、安全開架式閲覧)	8.- 新刊書棚を一部新調増加 11.11 3階に研究室、地階に学生自修室を新設し、児童室を独立させて復活 11.- 毎土曜日に童話会を開催(～1937? ただし開催頻度変更あり) 12.- (10.2とも) 目録室に電話機を置いて図書に関する質問を受ける	
1931	6	3.29 東京市立日比谷図書館、館頭今沢慈海退任 4.1 東京市立図書館処務規程改正、市立図書館全館が市教育局長の直接監督下に置かれることとなり日比谷、駿河台、京橋、深川各図書館に館長が置かれる	12.- さらに新刊書棚を新調 -.- この頃、蔵書10万冊を越す	-.- 新太郎、北越製紙会社相談役
1932	7	10.1 東京市域拡張により、渋谷、中野、西巣鴨、寺島各町立図書館、市に移管される	9.- 回転展列台を目録室に設ける	3.10 博文館復興建築落成 3.- 新太郎、金沢文庫の陳列棚、展示台など多数寄付
1933	8	7.1 「図書館令」改正(勅令第175号)	2.26 『大橋図書館件名和漢書目録列冊 スキー・スケート』刊 11.4 『杉村兄弟文庫目録』刊	-.- 新太郎、日本石油会社相談役
1934	9	4.1 東京市立両国図書館、閲覧料を徴収 -.- この年 東京市立淀橋図書館設立	10.- 『大橋図書館和漢図書分類案内:要目抄』刊(発行年月は、「40年史年表」による、竹内善作考案の有機的分類表)	-.- 新太郎、満州パルプ工業会社取締役会長
1935	10		5.- 児童室、館報『まあるい・てえぶる』創刊 → 『マルイ・テエブル』(16号:1937.9～24号:1939.3)	-.- 新太郎、日本工業倶楽部会長
1936	11	5.8 東京市立本所図書館新築開館、改築を機に児童の閲覧料有料化	7.12 『大橋図書館特別集書水蔭作品手沢本集書目録』刊 11.2 児童室の一室で展覧会を開催	-.- 新太郎、日本硝子会社取締役会長

1937	12	<p>2.18 東京市立図書館内に、東京市児童読物研究会が発足</p> <p>4.1 東京市立四谷図書館、公開書架を非公開化</p> <p>11.- 各地で開催された図書館週間の童話会が「軍国童話会」「愛国童話会」となり戦時色が濃くなる</p> <p>-.- この年、東洋文庫、藤山工業、大橋図書館が主唱して私立図書館懇話会創立</p>	<p>3.10 『新聞雑誌及特殊刊行物書名索引』刊</p> <p>9.- 『トピック』創刊(創刊号から「エコー」を設け利用者の要望を載せ回答) → 『作業と設備』(57号:1942.2~68号:1943.11)</p> <p>9.- 「作業審査会規程」制定(図書館事務の能率的な運用をはかる)</p> <p>11.- 『大橋図書館の菜』発</p> <p>12.5 東京市立日比谷図書館小谷誠一が転入して参事となる</p> <p>12.20 『大橋図書館和漢図書分類目録 数学之部』刊</p> <p>12.24 第1回「童話の会」を開催 この頃、蔵書 15万冊を越す</p>	<p>-.- 博文館 50周年</p>
1938	13	<p>4.- 灯火管制規則公布により覆い笠や黒塗りの電球発売</p> <p>7.1 東京市立日本橋、麻布、氷川図書館、開館時間を延長、有料化、書庫の非公開化</p> <p>この年 東京市立王子・荒川図書館設立</p>	<p>1.- 竹内、増築書庫を設計 春 大橋図書館中堅会を自治的組織</p> <p>3.15 館務研究誌『努力』(大橋図書館中堅会)創刊(～8号:1939.12)</p> <p>7.9 書庫、増築工事に着手、このとき学生自修室を閉鎖</p> <p>11.1 大橋佐平三七年忌を記念して11.3の命日をはさみ読書奉仕週間を創設(～11.7)、図書予約閲覧制度を設ける</p> <p>11.6 第2回童話と劇の会</p>	<p>5.10 新太郎、日本図書館協会から図書館事業功労者として表彰される</p>
1939	14	<p>4.4 文部省、大学予科・高等学校の教科書認可制を強化、この日、ハーディ『テス物語』など24冊を却下</p>	<p>5.26 『図書館作業叢書 第1編(大橋図書館中堅会作業報文 其1)』刊</p> <p>11.- 『トピック』(29号)で「トーマス・ハーディに関する欧文目録」、30号(1939.12)で「邦文ハーディ関係目録」を特集</p> <p>-.- 書庫増築竣工(地下1階地上4階建てで、将来4、5階増設可、鋼鉄使用制限のため書架はすべて木製)</p> <p>-.- この年 『博文館発行図書目録:大橋図書館所蔵』刊</p>	
1940	15	<p>7.18 東京市市民局社会教育課長、各図書館長にあて「左翼出版物二関スル件」を通達</p> <p>7.20 東京市立駿河台図書館、社会教育課長あて「左翼関係図書目録提出ノ件」を提出(37冊)</p>	<p>11.1 社会事業団体に対する児童文庫館外無料貸出制度を創設</p> <p>11.1 婦人特別室を開設(16名)</p>	<p>6.30 新太郎、大橋図書館書庫増築費および維持基金として15万円寄付</p>
1941	16	<p>3.1 国民学校令公布、4.1 施行</p>		<p>4 理事・協議員のまま石黒没</p>

1942	17		<p>5. - 蔵書約 18 万冊</p> <p>9. 5 40 周年を記念して『大橋図書館四十年史』刊</p> <p>9. 10 灯火管制の訓練 (～9. 12)</p> <p>12. 15 『芭蕉関係図書目録』刊</p>	
1943	18	7. 1 東京都制施行、東京市立図書館は都立図書館となる		7. - 坪谷「播粉木の重箱掃除」(『図書館雑誌』37-7)
1944	19	-.- 市内 13 館臨時休館	<p>1. 6 午後 7 時閉館となる(男子従業員禁止職種が出され職員不足のため)</p> <p>3. 1 午後 5 時閉館となる</p> <p>3. 30 加茂町立図書館へ貴重書を疎開</p> <p>5. 10～17 金属回収令による書架搬出</p> <p>5. 20 特高による閲覧傾向調査</p> <p>6. 25 麹町憲兵隊 5 月中の閲覧調査</p> <p>7 坪谷、大橋図書館を退職</p> <p>8. 23 竹内退職</p> <p>9. 4 没収図書の搬出</p>	5. 5 新太郎没
1945	20	<p>3. 1 都立深川図書館戦時休館、館舎は軍使用建物</p> <p>3. 9 東京大空襲で都立両国、浅草、本所、東駒形、西巢鴨各図書館戦災により焼失、深川も被災 (～3. 10)</p> <p>4. 1 (東京) 日比谷、駿河台、京橋の 3 図書館以外の都立図書館閉鎖、各館の職員は日比谷に集結</p>	<p>2. 17 臨時休館、このあと度々</p> <p>3. 16 図書の疎開(新潟県加茂町立図書館)</p> <p>7. 23 職員招集</p> <p>9. 3 開館(予告なしも 42 人の入館者あり)</p> <p>9. 17 進駐軍が駐留</p> <p>9. 19 進駐軍が図書館視察(9. 26 にも)</p>	
1946	21		<p>3. 25 進駐軍による図書の没収</p> <p>3. 26 搬出</p>	
1947	22			
1948	23		8. 15 専門図書館として開館	
1949	24			-.- 坪谷没
1950	25			
1951	26			
1952	27			
1953	28		2. 19 閉館	